

昭和五二年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都千代田区飯田橋4の4の8朝日ビル401号室 電話(03)261-7079  
振替 東京0-58431 労金 東京労金本店No.50234

購読料 月額300円 6カ月前納制

〈もくじ〉

特集・春闘・私鉄京成闘争を考える

■巻頭言 ■なぜ「自制春闘」なのか? ..... 2

■春闘座談会① ■階級的労働運動の原点を示す京成労組 ..... 3

実態からの運動が原点 ..... 10  
— 私鉄京成労組のたたかいから —

統一労組懇の実態を京都にさぐる ..... 13

読者からの意見 ..... 16

◇出版案内◇ 岩井・灰原編著『七〇年代労働運動の総括  
と八〇年代労働運動への提言 ..... 18

■緊急号外・好評発売中 ■『道』批判者たちへの反批判——『道』と科学的社会主義の擁護  
定価 五〇〇円 (郵送費含)

# 旬刊 社会通信

NO. 91

一九八〇年六月一日

一九八〇年六月一日

(毎月一日・二日・三日三回発行)

## ■巻頭言■

## なぜ「自制春闘」なのか？

独占資本は、「高成長だろうが低成長だろうが、最大限利潤を追求してやまない」という体制なのだ、ということを通じて典型的にみせつけているのが、七四国民春闘から今日にいたる階級闘争の実態であり、この間に独占側が「春闘管理」をめざした形相（ぎょうそう）のすさまじさに、むしろわが方が学ばなければならない、と思う。

そして独占側が「高成長から低成長へ」という転換を、常套（じょうとう）的な産業再編、つまりクビ切り・賃下げとスクラップ・ビルドという体制的合理化攻撃で切り抜けようとしただけでなく、その後の春闘じたいを「管理し支配する」ことに異常な執着をしめしたが、いま八〇春闘でそれが「完了したのかどうか」が問われているのである。

もちろん、われわれは「この階級闘争の実態をつうじて、これからは春闘を独占側に管理させてはならない」ことを意志統一し、そのための闘争に全力投入することを決意しなければならぬが、あらためて「労働運動の右翼的再編をつうじた社会党の変質——右傾化攻撃」にどう対決するかが最大の課題であることを全体で確認する必要がある。

国家独占資本主義下であるかぎり、合理化攻撃を企業内の視点でなく、「体制」的なものとしてとらえることが必然であったように、逆に、労働側がしかもあの歴史的な七四年に、春闘を「国民」春闘に格上げし一定の成果（三二・九%賃上げなど）をあげたので、独占側から強い危機感を背景としたきびしい反撃をうけ、階級闘争上の力関係で春闘を「管理され支配され」るにいたったことは、反省をこめ、現状として認めなければならない。

問題は、激烈というほかはないこの階級闘争の現状における「自制春闘」といわれる指導にある。

いうまでもなく、力関係で、管理され支配される時期、つまりわが方が長期抵抗を強いられる情勢があるにしても、「自制」を口実とした「階級闘争の放棄」はいかなる場合でも許されないからである。

日経連は、狂乱インフレを逆手にとり、まず七四国民春闘直後から「物価か、賃金か」という攻撃をしかけ、インチキな物価抑制と不況・倒産攻撃を組織し、一挙に七五春闘・賃上げを二三・一%におさえこんだが、そのために設置された「大幅賃上げの行方研究委員会報告」のアピールが「労使とも国民経済の立場で考え直そう」であったことを忘れることはできない。

この、独占側の要求にこたえたのが、鉄鋼を中心とするJICと同盟などであって、彼らは「労組がインフレの犯人扱いされずにすむ」（宮田JC議長）とか「これだけの自制にもかかわらず物価対策がまずくて、政府見通しの六・四%が守れないとなると、生活上必要なだけ物価が上っただけとっていく（賃金を）」という立場が出てくる。大衆運動としてはその方が支持される（『毎日』、八〇・四・三〇）などと憶面もなくしゃべりまくっているのである。

ところで、企業内では第一組合が相当にたたかっても、労資協調の第二組合以上の妥結はありえないが、体制下においてもこの原則（第二組合や右派幹部の防衛）は不変であり、この点でほんらい反独占である総評が八〇春闘で「八%への要求統一」を大衆不在のまま先行させた指導は問題である。

（真鍋重雄）

## ◆春闘座談会◆

## 階級的労働運動の原点を示す京成労組

八〇年春闘を語る (一)

八〇年春闘の総括は、これからの労働運動、社会主義運動に大きな意義をもつことはまちがいない。右派路線の破産が宣言された一方、生活実態を基本に据えた運動の拡がりが見えるところまでではないが、大きなウネリとなりはじめているからである。したがって、今後の運動をどう構築するか、その発展の芽はどのように生まれているかを中心に京成労組、国労、全電通そして他に二人の活動家を招いて、座談会をおこなった。今後二号にわたって掲載の予定である。

なお、春闘への基本視点は第八九号、第九〇号に掲載しているので、あわせて参照していただきたい。  
(編集部)

**司会** 八〇春闘も一応、ヤマ場を越えました。中小の多くの組合はまだ闘争中ですが、今度の春闘をどうみるか、今後、どう春闘の強化をはかるか、その芽はどう生まれているかを中心に、座談会を進めさせていたいただきたい。その前に、ご出席の皆さんから一言ずつこんどの春闘の感想をいただくことからはじめたい。まず京成のSさん、いかがですか。

## 民鉄協離脱は私鉄の分断

**S** このたびは全国の皆さんにお世話になって、何とか精いっぱいたたき抜いたところ  
です。

京成の場合は今年会社側が民鉄協を脱退し、合理化と格差賃金の導入をねらってやってきた。会社が赤字だったらどうするんだということがずっと相手側から出されて、やっぱり企業別組合ですから「会社あつての労働者」というのはきわめて強い。とくに高年齢者を中心に組織化が進められ、いまのような「合理化絶対反対」ではだめだということが大きく取り上げられた。前回までは、「赤字は労働者の責任でない」と反論していったが、今回は資本は、「たしかに赤字は労働者の責任でない、それはわかる、しかし実際赤字だから倒産しちゃう、倒産したら元も子もないじゃないか」ときたのが今回の特徴でした。私たちは、宮城交通なり他の労働組合のたたかいに学びながら、「これ以上さがれない」と内部を固めて、学習なりストライキ中の交流なりを精いっぱいやって、たたかいをしてきた。

民鉄協離脱は京成を私鉄で孤立させていく攻撃ではないか。もちろん公労協と民間との分断ということもあるが、私鉄のなかでの分断ということが今回の攻撃だったと考えている。

**司会** 次にOさんにおねがいます。

## ギリギリのところ、路線が問われている

**O** マスコミはさかんに反合理化闘争否定の電通路線に顔を立てて賃金問題なんかもめんどろ見えてやったらどうだとかかなり好意的です。特徴的なのは八〇春闘のなかで自治労には交付税を減額して、約六十億円、いままで自治体労働者の既得権で取っていたものを

ヤミ賃金だと称して削る。同時に電電公社は期末手当のプラスアルファ分の〇・四ヶ月分を支給することを認めている。いわゆるヤミ賃金として騒いでいた分を公認して支給する。つまり合理化に反対しない労働組合、こういう路線を固めていくためには少しぐらいのゼニは出す構えを取った。賃金は会社が赤字のところを無理してよそ並みに出した、会社も無理して出してくれたんだからこれからは企業再建のために少々の合理化はしようがないじゃないか、という空気が労働者の中から出るようにする、こういう計算があったと思う。つまり金で釣り上げて合理化をのませるのか、それともうこれ以上譲れない、ぼくたちはたたかう以外には生きていられないという路線で組合ががちり団結していくのか、こういうぎりぎりの分かれ目を八〇春闘は教えてくれたような感じがする。

### 大きい中央と地方のギャップ

W 一つは私鉄を押し上げて公労協もという考え方が逆手にとられた、結果として昨年の逆になった。公労協では国労、動労以外にストライキがほとんどなかったなかで（国労は）際立って孤立をさせられた。しかし職場のなかではそれほど孤立させられたという感じはない。公労委、第三者機関にたいする依存があれほど中央は強かったのかな、という感じが強い。労働者側委員が辞任したという情報が職場に流れたのはストライキ收拾段階だ。本部の情報からいうと途中から抗議ストライキになっていたようだが、職場では抗議ストライキじゃなくて、ストライキをやればもつと賃金が上がるだろう、それなりの調停案が出てくるだろうという気持ちで一所懸命ストライキをやっていた。そのへんの中央と現場のギャップというかアンバランスは非常に激しかった。

### 発展の芽をさぐる交流が問われる

M 労働者の犠牲がひじょうに増大している。首切りとか合理化、賃上げだつて数年間過年度の物価上昇を下回っている、健康破壊が進んでいる。そういうなかでストライキが激減している。春闘が始まる前に「自制春闘」や「動かない春闘」とくに朝日新聞では労資協調路線が定着したという特集をやっている。朝日の二月二十四日には、不況の時期に組合が人員整理に手を貸してきた、そういう労働運動だということが盛んにいわれるなかで迎えた春闘だと思う。

そのなかで八%要求が決められ、不満が春闘をたたかう前から出てきたことが特徴だったが、その不満がまだあきらめたいなものに終わっている段階のような気がする。それがどういう力になって下の方で蓄積されるような運動になっているか、そこら辺がことしの春闘の総括で非常に重要な気がしている。その点の交流が必要な気がする。

それを前提とした上で例の私鉄と公労協の関係とか、短期決戦みたいな春闘のあり方、そういう戦術論議はあると思う。

### 司会 今春闘では集会の結集率はよかったという話をいろんなところで聞くが。

W 国労の場合でいえば三月段階で国鉄合理化問題で、一時間とか二九分とか二時間と時間的にはアンバランスがありますけれども、それなりのストライキをやってきている。それが全体的にはたたかうというふうになった。東京でも一三日に三時間の出改札ストライキをやったし、神奈川では一五日の地域の統一ストライキに参加するという形で積み上げてきて、一六日の決戦、それなりにたたかかなければというところが職場に定着したと思う。

## これからの一年は春闘総括いかんだ

H これまでの春闘の延長線ではいかんだろうし、八〇年代の入り口で日本の労働運動が大きな転換点になる、皆そういつてきたし私もそう固く信じてきた。昔は、同盟はたいした力のない組合だ、はやくいえば国労の皆さんが鉄労を見ているようなもんで、仲間を裏切った第二組合で数がふえようが実際ストライキをやらぬし、たいしたことないんだという見方でした。党でいえば民社党です。公明だつていままでの日本の労働運動というか、基地反対闘争とか占領下のたたかいか安保・三池とかをぜんぜん知らないわけで、こんなものたいたことないと。そういう気持ちでいたなかで、高度成長期を境にしていかに民社が大手をふって歩いている、公明も大きな口をきいている。その連中が大きな顔をしてそれに総評すら寄っていく、この凶式をわれわれはひじょうに気にしていたけれども、それが今春闘での大きな問題で、これをどう考えるかが問われていると思う。

その具体的な例は、賃金の八%要求です。いままでは総評は独自にやってきました。今年は今頃からまったく大衆不在のまままで四団体合わせるというだけで八%といっています。総評の指導自体が第二組合的になった。下から独自の立場で議論をして、みんなの要求は一〇何パーセントかも知れないが、統一闘争を組むためにやむを得ないから八%に合わせてやろうじゃないか、ということならばいい。ところがまったくそうじゃない。第二組合が本物で、第一組合がうそもものだ。党の場合もそうで、田が出て行ったとき、彼は協会がガンだといつて出ていった。あんなのたいしたことないと思つてた。ところがいまの社会党だつて、何だかんだいいながら総評の影響を受けて、社公といながら社公民だ。総評が第二組合的になり、社会党が民社、公明党になる。そういうことが現実は今春闘で目の前に起きた。

相手側が七四年以降どういう手を使つてきたのかという意味でなるほどと思うのは、低成長になるのはわかつていたし、いまのうちにやらにやいかんという意味で例の公労協つぶし、そして総評つぶし、そして社会党右傾化。体制内というか第二組合的にするためには、なるべく力を尽くしてきたことがわかつた。JC相場が出て一発回答、ストなし。その後私鉄、全交通がたたかつて、私鉄が出ればそのあと公労協が上に出るといふ形できたのが、まず公労協の一角である全電通がストなし春闘、三年に一回といひ出している。今度は全通に手をかけて、七八年に刑事弾圧でストライキをやめさせた。そして(新潟大会で)批判をくつて全通は立ち上がった。七八年に鉄郵の問題があつて、全通は、七九年の年賀状まで吹っ飛ばすところまでいった。今度は大量処分を東京中心にかけて全通自体が統一できないようにしかけた。昨年は国労にはストライキ処分なし、全通にだけ大量処分。今年になつたら私鉄に千円を与えてストなし一発回答をやつた。そして公労委が私鉄が高すぎるとガタガタする。国労、動労はストライキをやつたが、第二ストライキの結論がまだに出ない。こういうふうな七四年以降の相手側の攻撃はまさに国労、動労をねらい、そして公労協、総評、社会党とえらくやつてきたもんだという気がする。そういう意味ではここでファンドシを締め直して八〇春闘総括をしつかりやることよつてのみ、本当の意味の構えが確立できるし、民間のあちこちでストライキが始まっているように条件はひじょうにある。まさに「窮乏化作用」の貫徹という状況ですから。ぼくは九月の全通大会を注目すべきだと思う。全通がそのまま右寄りになつてしまつたら、来年は国労がえらくねらわれる。だけど全通大会は弱点を克服するだろうと思ひますね。国労も今からしんぼう強く組織づくりをやつて、来年はみんなが納得できるたたかひ方をして、やつぱり第二組合

は間違いだ、第一組合が本物なんだと、社会党にも影響を与えていける。これからの一年間は八〇春闘総括いかんだろうと思う。

**司会** 全通の仲間にはメーデーの隊列が最後尾ということでご出席いただけなかったが、職場段階には士気の高揚がみられる。全通の仲間との話しでも、路線の弱さを大会で克服するとの意志がみなぎっている。表情は明るいですよ。

### 原則的にたたかっている京成労組

**M** いまHさんのいわれた総評自体が第二組合的になる攻撃を受けて、その中心に公労協つぶしが出てきているなかで迎えた春闘だろうと思う。その場合、こういうとらえ方はできないだろうか。八%要求に代表される右寄りの同盟やJCにすり寄っていくやり方は、七七春闘から顕著になってきている。右翼的な労働運動に接近していつて労働運動も統一するし、その一段階として春闘も要求を統一していく流れがある。右翼的労働運動統一再編のスローガンになっているたとえば労働組合主義、これは合理化に協力することによってうまくいくという考えだ。ところがSSKのたたかいは見れば生産性向上運動に協力した結果が造船産業の過剰生産となり、その結果また合理化、希望退職、賃上げストップなどで乗り切るといふ提案をのまされてきた。ようするに生産性向上運動に全面協力していくと、結局労働者は飯が食えなくなる。一方的に犠牲をこうむるだけだ、結局たたかわざるを得ない。そういう路線が反合理化闘争の路線だよということが事実の上ではつきりしている、という情勢が一つある。合理化協力路線の矛盾がSSK闘争で暴露された。そういうたたかいは中小企業などではいたるところにあると思うが、そういう立場で原則的にたたかっているのが京成だ。

もう一つは、労働組合主義のなかにある労働組合の社会的責任論。つまり(労組が)近代社会を構成する有力な一団体として社会的責任を持つていかなければならないという一つの考えが、賃金闘争では社会契約型、物価上昇にたいしては責任を持たなければならぬ、自制ある春闘が要求される。この社会契約型というか数字の整合性というか、そういうものが八%要求となった。ところが四団体みごとにそろったとたん、「それじゃ食えない、だめだ」と春闘が始まる前から暴露された。今後物価は賃上げとは関係なしにもものすごく上がっていくことが大衆的に暴露された。社会契約型路線の矛盾が露呈されたわけだ。攻撃が強まると同時に階級的労働運動の路線の正しさが立証されたなかでたたかわれてきた春闘だととらえていいんじゃないか。同盟も第二春闘をたたかうのではなくて、足りない点は来年やりましようといっている。同盟もはじめから足りないことを認めていたと思う。そういう意味では路線が破産したということが一方ではある。

### 統一闘争の基盤は拡大

**H** ひじょうに問題だと思っているのは、総評側がうまくいったと自画自賛していることだ。逆に同盟側は、これはひよつとしたりひよつとするぞ、たいへんかもしれんぞ、だから政府は六・四%で物価をちゃんとやれと政策要求を出している。反独占じゃなくて運命共同体論でやらしている。総評の幹部の方がわれわれが心配していることを心配しないで、むしろ同盟の方がそこを先取りして組合員の信頼を得ようとしている。

電機労連の下部でストライキがあった。それをやらせた、抑えきれないと。だから同盟中連の方がうまいというか玄人というか、一人ひとりの労働者のことをよく知っていて、

うまくはめていくことに全力を挙げている。そのへんのこととは一体どうなっているんだと、下部の実態を重視する運動を何かの方法でやらんとたいへんなことになるといえるのが一つです。

もう一つの京成のことを私なりに考えると、今度京成闘争では敵はとことんやるだろうと思つた。七七、七九、八〇年と三回目ですから。松垣論文とか「だるまニューズ」とかいつせいに、分裂しない第一組合のなかでは最大限といつていいほど反執行部というか「反協会」というか、大騒ぎをやっている。そういうわけでこれはいへんなどろ沼を決意したんだなと思つた。現に二日半ストライキをやらせた。ところがおさめて一万二〇〇円、一時金も〇・四カ月だけのカットでおさまった。これは京成自体がたたかうことを欲している、社青同、協会が強いだけでなくて現実に労働者は怒っています。内部の高まりがあり、京成自体がたたかうということが一つあつた。これがなければ元も子もない。経営者も用意してやってきた。ところがいまいった通り、ストなし春闘の仕上げとして私鉄の株を上げて、私鉄総連にものをいわせるためにはいつせいにボンと二万三〇〇〇円を出した。京成の資本家だつてまだやる気だつたかもしれない。だけど独占全体が、ストなし春闘の方に向けるためには私鉄総連と同じような金額を京成に出した。そのへんのことを考えると相手側は俗にいう「金持ちけんかせず」で金で済むことならば金を出す。

国労の場合だつて昨年の凍結処分と今年の分を合わせてドカンとやるつもりか、あるいはちよつとだけやつといて、来年国労、動労の孤立ということで、合わせて三年目というところでやる気なのか。後者じゃないかと思うのは、金持ちけんかせずで——かつて三池・安保のときに集中したでしょう。今度は合理化に集中した。へたをするとなんか何かあるとワツとの盛り上がる。大きなたたかいになると統一闘争になる要素がある。それも勘定に入れて一万二〇〇円を出したし、〇・四カ月だけカットしてそろえたと思う。ですから統一闘争の芽があることを踏まえて、粘り強く交流活動をやつていく、相手はそのこわさを知っていると思う。ぼくはそういうふうな解釈して、逆手をとつて、これから同盟にすり寄るのではなくて、逆に同盟下部を引きつれてやるような運動を二、三年かかって粘り強く、やることが一番大事だと思う。

京成で聞いてみると、「一万二〇〇円で勝つた、よかった、同時に合理化のひもがついていなくてよかった」とこう思っている。どうですか実態は、Sさん——

### 原則の正しさが仲間の心に浸透しはじめた

S 役員段階では、賃金は一万二〇〇円、臨時給は若干格差がついたがよくやつたとなつているが、一般の組合員は、一万二〇〇円といつてもほとんどん物価も上がっているし、ちよつと食えないという声も出て来ています。収拾の段階で、何だ合理化が出なかつたのか、何か裏とりひきがあつたんじゃないかという声はあつた、一六日、一七日ストライキをやっているときに、これで合理化をくつつけたら、二〇、二一日は絶対にストをやるといふ雰囲気職場にみなぎっていた。合理化とバスターしての賃上げにずっとなっているわけで、中小なんかとくにそうだし、千葉県内の私鉄でも合理化とのバスターで大手なみを取つているところがある。そういう意味では合理化を出して京成にストを打たせることになれば、中小私鉄を含めて全体的にたたかう情勢が出てくる要素はある。むこうはそこを恐れたんではないかと推測できる。

臨時大会があつたが、本社関係の代議員が中心になつて経営参加論でいくべきだという



意見がずいぶん出た。合理化絶対反対でなく、労資協調でいくべきだと、今までなかったことがどんどん出た。

今まで反協会、反社青同ということがあったが、それらの本質が労資協調だということだんだん全体的にはっきりしてきた、メッキがはがれてきた。そういう意味では職場の良心派の人たちが結束して、今まで社青同といていたのはおかしいという雰囲気が出てきています。京成のなかだけを見ていると有利な条件がどんどん広がってきている。駅の助役でも、そういう連中はおかしいという認識が広がっている。やっぱり原則的なことがだんだんわかってきたと思っています。

### ていねいな論議に感心

〇 一七日に私鉄総連に最終回答をしたときに、会社側はメモをつけている。「企業再建のために組合の協力を期待して以下の回答をするんだ」と、さりげなくこれから合理化をやると宣言している。京成の闘争を見て、賃金は大手なみに上げてやるから企業再建のために労働組合は合理化に協力するという協定を一札取りつけることになり固執するのではないか、その平和協定とパートナーでよそなみに賃上げと攻めてくるのではないかと思っていた。資本家の構えはだいたいそういう手口だから。

あの程度で京成資本は合理化と抱き合わせでのませることをあきらめたのかという問題です。一つには活動家が信頼されて、下の方でたかう体制がある、それが一番大きな原因だ。しかしその反面には会社がつぶれたら元も子もないぞという思想教育をかなり広げたという点で、会社側は自信を持っているのではないか。ここで企業再建に労資協定を押しつけることになれば、職場で討論している対立点がますますはっきりする。今年の一〇月に役員がある、役員があるときに労働者内部の対立点をはっきり自覚させるような態度をとっては損だ。この両方だと思う。つまり京成労組の活動家が職場の労働者との討論をきめ細かくていねいにやっている。向こう側はさっきいわれたように「赤字は労働者の責任ではない」ことが労働者に浸透してきたら、今度は「それはそのとおりだ」といっておいて、「しかし現実には赤字が起きているからどうしようもない、つぶれたらどうするんだ」ともう一回巻き返してきたのにたいして、活動家諸君がどういうふうに対応したか、ひじょうに学ぶべき点がある。S Kは、合理化三原則をのんだ。労働者が譲ってさかった。会社がつぶれちゃどうしようもないからがまんしようということになった。しかし残業までやらせない、これじゃ食えない。合理化で譲ってがまんしたが、結局労働者は生きられないと立ち上がった、宮城交通の問題はどうだと具体的な問題を突き出して労働者のなかでいねいに討論している。そのていねいな討論をつうじて組合員が、会社側は赤字だといっているが財産を売り払うとか、銀行の利息をまかせるとか、いったいどんな努力をしたか、何もしていないじゃないか。それでいて赤字の責任をおれら労働者にかぶせて、まず最初に犠牲を押しつけてくる、こんなことが許されるかといひ出すようになってくる。これが京成闘争の一番の力だ。

したがって京成に次にねらってくるのは、この労働者のなかに広がっている反資本主義の思想、赤字だ、つぶれるぞということに対して屈服しなかった京成労働者の魂をどうゆ



さぶるかということですが。

### 学ぶところの大きい京成のたたかい

Sさん、今度はSSKを活用した、宮城交通の例を出した、このまえは沖電気だ。具体的なんだ。統一闘争を交流していろいろな実例を有利に使う、その辺のところを京成に学ばなければいかんと思う。Wさんのところで、七九春闘のときには沖電気のパンフレットを二百冊ぐらい買ひ込んで勉強した。国労の社青同の諸君や協会系の皆さんにはそれが出てきているが、まだまだ「わが山主義」で自分本位にものを見ている。Wさんは全通と交流されているし国労にはあちこちいい芽があるが、全体的には「国労は」となる。そんなことをやっているのと袋だたきにあうか、それを理由にして右傾化するかのどっちかだ。それだけの努力をする、これはやらなければいけないとつくづく思っている。真剣にがんばるからそういう知恵とか戦術というか、行動ができる。どうしたらいいかと編み出し編み出ししてきている。

S 民間は弱い、弱いからどこから学んできて何とかたたかおう、そういうことだと思ふ。ぼくは葛飾の社会党にいるが、公労協の人と交流するとやっぱり違うなという感じだ。「おれのところは公労協だぞ」という感じがある。

○ 京成の皆さんはわれわれのところにもよく想談に来たり、意見をよく聞いてくれた。よそのたたかいかから学ぼうと非常に謙虚で真剣さを持っている。ぼくが敬服しているのは、私鉄総連のなかで京成闘争があったことです。敵は民鉄協を脱退して、京成は京成で特別な対策をやるといったが、労働組合は総連にとどまって総連の指導のもとにたたかう。対策委員会ができた。敵は民鉄協を脱退したが、最終的には準中央交渉で結論を出すという、産業別のなかで京成闘争がたたかわれた。京成が謙虚にその指導のもとで進めていることはりっぱだと思ふ。総連にそれだけの組合民主主義がまだある。産業別統一闘争を崩す攻撃だから断固守ろうとやってたかかった。

ストの収拾時点で京成は下からの民主主義を大事にするという意味で、ストライキをやめる前に闘争委員会を開くということで、闘争委員に待機命令を出した。対策委員会では組合の幹部としてストライキを中止するという腹が決まっているならば、ストライキを中止してから闘争委員会をやればいいじゃないかということ、情報連絡が途中で修正になる。職場ではそれをめぐって若干の動揺があったらしいが、すなおにその指導に従った。職場ニュースを見ると若干混乱した事態を、事実経過を淡々と説明している。総連がけしからんとか対策委員会は下を無視しているというような、組織を批判するいい方は全然していない。まわりの情勢を考えてやっているな、と。電通のわれわれが反省したことが学ばれて生かされている、そういう感じがします。

S そんな強いところばかりじゃないですよ(笑)。

(つづく)

## 実態からの運動が原点

——私鉄京成労組のたたかいから——

### 準大手中央集交の参加へ

私鉄総連結成以来といわれる「大手中央集交窓口突破」三・二一平日ストを整然と打ちぬいた後、同日京成労組は闘争委員会を開催し、今後の戦術の討論をおこないました。本部中央闘争委員会は、「資本の構えは強固である。短期のスト戦術では窓口突破は厳しい。したがって今後は、あくまで中央集団交渉への参加を求めて、総評・全交連・社会党私鉄対策特別委員会の協力を得ながら、国会での追及、運輸省、民鉄協への働きを強め、京成対策委員会（委員長—私鉄総連黒川委員長代理）の指導のもと、総連・地連・単組が一体となって粘り強い『交渉』を進めていきたい。そのためにも、組織内外との交流・対外宣伝を強化し、決戦スト権の高率確立を図りたい」との提起をおこなってきました。

これにたいして委員会のなかで、情勢のとらえ方をめぐり質疑が集中した後、一委員から、「ストを打っても窓口突破ができなかったものが『交渉』で果たして窓口が開くのか疑問だ。スト戦術にはこだわらないが、『実力行使を背景として』という一項を、挿入してほしい」という動議が提出され、賛否激論が交わされました。最終的に委員長集約として「決戦を前にして採決をとることはできない。あくまで京成労組は、京成資本にたいして大手中央集交へ参加するよう追求するとともに、格差賃金・首切り合理化は絶対許さない、という立場を明確にし、動議提出者の意を充分にくみとりたい」と結び、全会一致で中間方針を確認しました。

その後、職場集会を中心とした下からの闘争態勢づくり、ステッカー闘争、地域・乗客への宣伝活動の強化等々のなかで、京成資本を追いつめ「準中央集団交渉」へ参加させることをとりつけました。その要因は—

- ①私鉄総連結成以来の「窓口突破」平日ストを、一糸乱れず整然と打ちぬいたこと。
  - ②党・私鉄総連・産別をこえた支援・連帯行動の広がり、マスコミを含めて社会的関心を高め、資本を追いつめた。
- の二点をあげることができます。

### スト権が高いとドロ沼化する？

四月一六—一七日総連決戦ストに向けて、本部中闘は「不況・赤字・倒産攻撃に負けず高率スト権を確立しよう」という異例のアピールを発し団結強化を呼びかけました。

しかし、京成資本は再び組織分断とスト権低率化をねらい、一部職制や組合員を通じ思想攻撃を徹底しました。赤字・倒産攻撃の内容に大きな変化はありませんが、一人ひとりの組合員にたいし執拗な「オルグ」で詰めより—

「スト権が高くなるとドロ沼闘争になる」

「会社がつぶれたら元も子もない」

「今の京成の方針は会社をつぶす」

等々スト権×運動をくり広げ、最後に「組合もこれならゆずれんという線を出すべきだ。そして、今後は経営再建のために組合も経営に参加してゆくべきだ」と結びました。

京成資本はさらに、社内報『月刊京成』で再建には他社なみ生産性が必要と訴え、それには「組合の協力＝合理化」が絶対条件とせまり、決戦前段では「出向会社及び社員の働く実態報告」を特集し、あたかも「出向・配転はバラ色＝出世の道だ」という幻想をふりまきながら、格差賃金・首切り合理化の正当化を主張し、対外的には雑誌『実業界』で、

“(旧来の)京成労使甘えの構造”なる怪論文に援助を受け、産別統一闘争の分断を図ってきました。

これ以上何がゆずれぬのか！

巧妙さを増す資本の思想攻撃にたいし、労働組合では、「不況・赤字は労働者の責任ではない」「総資本の要請を受けて一日二〇万人もの労働者を輸送している、京成がつぶれるわけではない」という理論的反撃をすると同時に、佐世保重工・宮城交通等のたたかい(実態)から学び、さらには他私鉄との交流のなかから「合理化されたら職場はどうなるのか?」の事実から、無数の話し合いの場をもっていました。交流のなかでつかんだのは、「京成は他私鉄より千円札は五、六枚少ないけど、労働条件・職場の民主化は一番進んでいる」ということでした。「俺たちは苦しいけどたたかってきたから、今の条件を守っているんだ」という認識が広がり、「会社は少しぐらいゆずれんというが、これ以上どこをゆずれんだ」と仲間同士の怒りは日増しに高まってきました。

◎ロングレールは、首切りレールだ。

◎部課長よ一日で良いから信号扱いをやってみろ。

◎ツルハンで線路を掘ってみろ。

◎住宅ローンの支払いで一日二食だ。

◎女房が出産で会社を辞める。来月から俺の給料で食わせなけりゃならない。

◎息子が大学へ入り、月六万円の仕送り。

等々、一人ひとりの生活や労働の実態のなかから、格差賃金も首切り合理化も絶対ゆずれないという実感が強まり、スト権は約八八%と「窓ロスト」より、一〇%のアップを勝ちとりました。

意外?な収拾

八〇国民春闘の大詰めであるJ・C回答後の四月一六日、交通共闘はストに突入しました。同日、私鉄総連、国・動労とも一定の妥協のもとで、スト闘争を中止しましたが、京成労組は予定通り(?)資本の格差賃金提案を受け、ストライキ闘争を継続しました。この段階では「この闘争の長期化は避けられないだろう」という情勢分析が、役員から組合員まで共通の認識でした。しかし、翌一七日一六時四〇分突然スト中止指令が出されました。会社回答が検討に値するものであると、京成対策委員会、本部中闘が判断したからです。

◎収拾内容(要旨)

- ①賃金は、一万二二〇〇円（他大手並み）
- ②年間臨時給は、四・七五五ヶ月。プラス〇・一ヶ月。（実質的に他大手よりマイナス〇・四ヶ月）
- ③賃金・臨時給の配分は別途協議する。

この回答にたいする職場の仲間の多くの意見は、「必ずしも満足できる内容ではないが、本給の大手並みは成果」「合理化ひもつきでないのが良い」「なぜ合理化が出なかったのか。不気味だ」等々でした。

四月二四日に開催された闘争委員会では、全委員とも「私たちの生活実態からみれば金額的には不満である。しかし、最後まで産別統一闘争を軸にたたかいた結果として、資本を追い詰め合理化を出させなかったのは成果である」と口をそろえ述べました。これを受け高橋委員長は、「資本主義社会が続く限り合理化はなくなるならない。京成資本もいつまた出してくるかわからない。私たちはつねに意志統一を深め、合理化をハネ返す強固な組織を日常的に作るしかない。それには、七七年以降の総括を大衆的にやり切っていくことが大切だ。働く者の社会を建設するため、当面参院選での社会党勝利を勝ちとろう」と集約しました。

### 闘いの中から展望は開ける

「なぜ首切り合理化提案がされなかったのか？」「民鉄協脱会・大手中央集交拒否」という高度な戦術を組みながら、「なぜこんなに早期に資本は譲歩してきたのか？」組合員のみならず、役員、活動家も卒直な疑問をもって総括運動を進めています。客観的情勢として――

- ①「私鉄労資は九分咲き」民鉄協Y労務担当発言に見られる通り、「ストなし私鉄総連」への布石のため、京成に単組独走ストをこれ以上打たれては困る。横への広がり。
- ②交運共闘のストが与える社会的影響の大きさ。私鉄のなかでの京成の奮闘が、私鉄総連を支え、国労・動労へと結びつく。「日本の労働組合は良い方向へむいている」という日経連の松崎発言にもある通り、交運共闘のスト倒しが、危機にひんする日本独占の悲願である。それには、私鉄総連・京成労組にストを打たせてはならなかった。
- ③現実に激電二七三通の他、激布やキャンベが多数集まり、支援の輪が広がっていた。主体的条件として――

- ①京成労組の方針「長期抵抗・統一路線が、言葉ではなく実践を通じ定着している。
- ②学習を基礎に、大衆集会を大切に、職場抵抗「反合理化闘争・日常的改良闘争の積み上げの中で組織を下から支えている。
- ③資本の思想攻撃にたいし、宣伝・扇動の武器として職場新聞が定着し、反撃の重要な武器になっている。「日刊乗務・各駅停車等」。
- ④職場の社会主義者（社会党员・社青同盟員）の活動の献身性。

等々があげられます。実際に、スト支援に三日間京成に入った青年共闘の仲間は、「京成は強いと聞いていましたが、行動的な激しさはありませんでした。しかし、職場集会では皆が腹を割って何でも言える明るい雰囲気があり、資本の攻撃（第二組合路線「怪文書

## 統一労組懇の実態を京都にさぐる

### 突然変化した地評第二九回大会

京都におけるローカルセンターである京都地評が大会を「休会」させたり、「休憩」したりするということは、「統一労組懇」問題が出てきた今に始まったことではない。戦前からの共産党運動の土壌があり、戦後「二ナ川民主府政」のもとで蓄積してきた日本共産党の運動と組織は、労働運動のなかにも教組・自治労など公務員組合を中心にやはり一定の力をもっている。過去にも京都地評の役員に、共産党系の単産から常任幹事や副議長クラスはもとより、議長や事務局次長を選出したことがある。

一九六三年一〇月には、原水禁問題をめぐり地評大会が紛糾、休会し、一年後に「修復」した経験をもっている。七六年一二月の第二六回大会では、共産党系代議員がはじめて多数をしめ、原水禁・平和運動についての原案が否決され、人事問題をめぐって休会した。七八年の第二八回大会でも人事問題で休会し、七九年の第二九回大会では大会二日目に、「長期の休憩」にはいったものである。

七九年の第二八回大会までは、共産党系反主流派は京都における共産党の社会党にたいする政治的力量の優位（現在、国会議員共五にたいし社一）をバックに、地評大会の代議員数を増やし（ほとんどが教組、自治労などの会費納入人員増によってであるが）、その力関係の変化に応じて、方針案の一部修正や人事を要求するということがあった。ところが、昨年の一月二日より「長期の休憩」にはいった第二九回大会では、それまでとはかなり質の違った大きな問題があまりにも短時間のうちにぶつけられ、それまでの主流派、反主流派間の「申し合わせ」、「話し合い」も一べんでふきとんでしまった。それは言うまでもなく、この地評大会直前に開かれた共産党第一〇回中央委員会総会で事実上新しいナショナルセンターをめざす「統一労組懇」強化の方針を決め、その直後に地評大会と併行して（一月二日～三日）開かれた統一労組懇主催の学習大交流集会の内容がそのままの形でもちこまれたものである。京教組、国会共闘、自治労など共産党系一三単産共同提出の修正案という形（京都地評は三九単産）で、中央段階における労戦と社公中軸問題への批判という内容であった。

### 唐突に共産党が妥協案

この大会に提出した常任委員会の原案は、共産党系役員も交えた機関で長時間討議して満場一致決定した「玉虫色」とも「社共共闘派」ともいわれる、どちらかといえば「良心的」な原案であった。七〇年の第二〇回大会で「社会党支持」をはずし、七六年の第二六回大会で護憲・原水禁・反安保加盟がはずされた上での「地評のような協議体組織で統一と団結をはかるにはこれでいくしかない」原案だったのである。したがってこのような「修正案」が出されるのは、まさに寝耳に水、地評の幹部でもこの話を聞いたのは大会開

催のついで、三日前というありさまだった。「これでは修正案というより対案ではないか。」  
 「春闘を前にして、自分らの代表も含めて決めた原案を『反古』にして、大会を流会させるとは、これまでになく、『主流派』（社会党系）が結束し、共産党員であつても、困難な春闘情勢と組織事情を抱える民間労組幹部のなかには公然と批判するものまであらわれた。」

そうして、この大会は、「原案・修正案とも掲載した資料をつくり、この間の経過を職場討議に付す中で、再開の糸口を見いだす」という相方確認の上で、「休憩」にはいったのである（共産党系は、この確認によって、一定の成功を得たという位置づけのようだった）。その後は二月一三日に事実上発足した京都統一労組懇が、独立した事務所と専従役員（事務局長は半専従、事務局次長三名のうち二名が専従）をもち、『赤旗』や『京都民報』で連日宣伝し、各単産内部や各地域で統一労組懇を結成し、「地域総行動」を展開するのである。そしてこの間、修正案提出に加わった国労京都支部では機関手続きもなくおこなったことに内部からのつきあがりがあり大阪地本の指導がはいったり、これまでは共産党系も共同歩調をとろうとしてきた谷内口地評事務局長を赤旗で全面批判したり、京教組の大会議案書では名指しで非難する、富塚発言によって中央総評から「調査団」がおくられるなど、その論争はかなり加熱したものとなった。「打開の糸口は反主流派の『全面撤回』以外なし。分裂も含めて参院選後にはつきりするだろう」とは、主流派と言われる部分の方の見方であつた。

ところが三月にはいり、急に共産党系が「妥協案」を持ち出し、「不一致点はタナ上げ」、人事もタナ上げ（彼らは事務局次長を執拗に要求し、あわよくば議長も常幹の半数もと言っていた）して、春闘本番直前の四月五日に再開大会が開かれ「シャンシャン大会」となったのである（原案も修正案もタナ上げにして「当面の運動方針案」が提案された）。この一時的な「和解」提案の背景にはいろいろあるだろうが、一定のキャンペーンははれた、あとは参院選後の中央指令待ち、自分らが修正案を出したことを分裂の大義名分にされたくない、社会党系単産の結束への警戒等あつたと思われる。また京都の場合には、中央の労戦問題もさることながら府知事選が大きな位置をしめ、そのなかでの京都地評のもってきた影響力が大である（七四年知事選までは社共統一のニカワ役となり、選挙の中核となってきた）という事情がある。二年後の府政奪還に向け、なんとか地評の名を、ということがあるように見受けられる。

### 独自行動を強める京都統一労組懇

とりあえず問題は参院選後の第三〇回地評大会にもちこされる形となつたが、統一労組懇の運動はその後にも配慮されている形跡はまったくない。京都統一労組懇の幹部はつねづね、中央やまた大阪なども位置づけが違つて、分派行動ではけつてない、地評のなかで共同行動し、不足している点を補強していくのだと語っている。しかし、それなら地評で中央段階の問題の「修正案」を出しながら、中央総評臨時大会（二月）で何も出さないのはなぜか、また具体的には、三・二三の春闘共闘の統一行動では反主流派単産はほとん

ど動員がかかっていたのに、三月二五日に同じ会場で統一労組懇が集会を開いたときにはフル動員した。今春闘の重要課題であると全体で確認した大阪電力・関西ガスの交渉には京教組からは一人の参加もなく、同じことを統一労組懇でもやっている。「地評は未組織労働者をほうっている」(四月一日、京都新聞、労組懇沢本次長)というが、地評がおこなった未組織向けの早朝ピラまきには、京教組も国公共闘も一人も動員割当を消化していないのはどう説明するのか、等々多くの疑問や批判が出されている。言行不一致であり、「やり過ぎは分裂招く」(四月一日、朝日夕刊、谷内口地評事務局長)ということを肝に銘じ、彼らは自制しなければならぬ。

### たたかひの構えを欠く路線

また、彼らは右寄り労戦再編に反対してはいるが、「反合理化、大幅賃上げ」の構えはない。京都の地場賃金相場を決定する民間大手製造業の労組には、彼らの影響力はほとんどない。それ以上に問題なのは、彼らの路線である。この間、現場の活動家にこういう話しを聞いた。一つは、貯金局の合理化問題について彼らは「上京総行動」という形でデモや署名やピラまきで、地区労をまきこんでやっていこうとしている(それ自体は結構なことだが)。その貯金局に勤める一婦人が「夫が府職労(彼らの拠点中の拠点)の組合員だったが、知人がサラ金に手を出し、保証人なので退職金をあてた。それでも足らずに労金から六〇〇万円借りて、月三〜四万円返している。幸い子供がなく、母親と三人ぐらしだ。府職ではそんなこと組合に頼むのはアホらしいとなっている」ということである。だから何としても貯金局で働き続けたいと語ってくれた。また、全通のある職場で精神疾患の仲間を当局の「不良労働力」排除攻撃にもめげず守っていくたたかひをしている杜青同の活動家Y君が、たまたま会った共産党系の強い全通R支部の一組合員にその話をすると、「うちにもそれとそっくりの話がありますが、組合役員は統一労組懇で外回りばかり、執行委員も浮いてしまうので職場でよう問題提起できずにいる」ということであった。

この二つの話しに彼らの路線の誤りが典型的にあらわれているように思える。と同時にこの不況合理化とインフレの厳しい情勢で、「個人の問題」という職場の資本主義的常識に具体的に反論し、サラ金に苦しむ仲間を支え、「不良労働力」と攻撃される仲間を、反合理化闘争としてたたかひ守っていく実践をしている、わが社会党の青年党員と杜青同に結集する若い活動家の路線の正しさが明らかになっているのではないか。

いくら大言壮語をしても、このような運動を職場から具体的に積みあげていくしか「総評を階級的に強化」することも、地評の「革新の伝統を守る」(前掲朝日、吉田自治労府本委員長)こともできないのではないか。その点では、「総行動」といった大ワクだけでは現実のカベを破れない。統一労組懇の方針を見ても、そこが欠けている(前掲朝日、谷内口氏)という指摘は正当である。問題は、このような情勢のなかで「総評路線を守る」ことを自任するわが左派社会党が、現場でこつこつとたたかっているこのような青年活動家とともに悩み、ともに運動をつくり、その先頭になってたたかっていくことではないだろうか。

(京都・A)



## ◇読者からの意見◇

編集子のたのしみ、それは読者との語らいである。直接膝を交えること、電話、意見・投稿、どれも編集子に力を与えてくれるからだ。誌面をこらんだだければわかるとおり、全国の読者から投稿が相次いでいる。うれしいことである。だが紙幅から掲載できないものも多い。春闘総括と参院選が当面の大きな課題である。これに関連する意見を三つ四つ掲載し、読者の土気の高さを紹介したい。こうした意見、投稿をすべて掲載できるくらいに紙幅をふやしていただければ幸いである。

例年になくストライキは打ち抜かれた

北国福島においても、桜の花が散り始め、今日からは磐梯吾妻スカイラインが再開通し本格的な春を迎えています。

同時に、八〇春闘も地場産業、中小民間のヤマ場を迎え、赤旗がいきおいよくはたみいでおります。今年はストなし春闘かなどといわれてましたが、どうしてどうして、例年になくストライキがうち抜かれ、生活の苦しさを反映した闘いが取り組まれております。

青年共闘での「交流と学習」が着実に生かされ、団交に、ストライキにと支援交流が取り組まれ盛り上りを示しています。

そのなかでも特筆できるのは、全国一般岩代薬品労組（組合員一六名）が春闘前段のたかいで、会社側に賃金差別の不当労働行為を認めさせたことです。それは、七三年の組合結成（当時一五名）以降、友和会（会社側の親ぼく会）五四名との間に、一人平均月一万二千元から一万五千元の差別を賃金、ボーナスにおいてやってきたということと団交（徹夜も含め一週間）のなかで認めさせ、賃金台帳を出させ、現在、謝罪をさせ差額清算をさせているところです。

参院選も六月二九日投票と決まり、福島県においては「分裂」の後遺症もあり厳しいたかいとなると思いますが、八〇春闘の成果を精一杯反映させ、社会党強化にむけ頑張ります。

今後とも頑張って私たちの指針となる旬刊誌を発展させて下さい。（福島・M）

京成闘争に学べ！

京成闘争については今一度ほりさげて、職場の活動家諸君がどのようにして大衆を組織してあのねばり強い力を作ってきたかを学ぶことは、極めて重要と思います。

電通闘争で不十分だったことを、かれらはみごとに実践の中で成功させています。特に反動派との論争のやり方や職場討議のリードのやり方など今後の運動に大切なものでしょう。小生もそういう観点で目下調査研究をしているところです。

貴紙の到着を心待ちにしております。（千葉・O）

公選法改悪にキャンペーンを

私は発刊の時からタイミングよく出される記事に目を通し、随分自分の考えを整理する

のに役立てて来ました。

香川では参議院の地方区の候補者作りが遅れヤキモキしましたが、やっと三月二〇日に決定し、今たたかう体制を着々と準備中です。候補の選考に当り、右余曲折を繰り返しましたが、当初右寄り幹部の無所属、無党派での思惑に対し、県総評を筆頭に左派が結集し、一定の歯止めを勝ち取りました。このたたかいのさい中にわかった事ですが、又中央で公選法の改悪が意図されていることを知り、急いでペンを取りました。

中心は又山本幸一氏らであり、中味は公営部分を増やし、その見返りに新報カーは出さない、チラシも出さない等の改悪案になっていて中央の全国代表者会議の中で出された模様です。先の改悪で現場第一線の選挙をたたかう部隊は大変不便な事になっています。一番関心のある時に政策を訴え、人を売り込むことが不可能になります。是非貴紙で調査を行ない、もう少しなんでも出来る選挙法にするようキャンペーンを張っていたきたいと思えます。私達地方の活動家も党の機関、労組の機関、新報のひろげ欄等も活用して反対運動を盛り上げ、悪意を粉砕したいと考えます。一番困るのは知名度のない若い候補者、特に自治体選挙では名前入りの新報号外が出せなくなったことに壊滅的な打撃を受けています。全国の良心的仲間の力で反撃をしていきましょう。

(香川・O)

#### 米国の思い上り

日本は独立国だというが、現在のイランに対する制裁、オリンピック不参加、はたまた自動車(小型車)工場の米本国進出、石油問題、自衛隊増強問題等々、もはや日本は米国の註文を一方的におしつけられ、大平政権はカーター政権に振りまわされ、キリキリ舞の状態にあります。

また他国(日本)に対するイルカ解放(漁業問題)にしても、米国人の日本軽視など思い上りもよいところである。

私は昭和一二、一三年の頃、日本に対する米国の経済封鎖(A・B・Cライン)等は今もはっきりと記憶しています。イランに対する制裁もまったく、過去の日本へのそれと同様であり、彼等の常套手段です。

同盟国の名をかりて、他国まで無理やりにまき込み(同盟国とは従属国という意味らしい)、漁夫の利を得ようと夢見ているカーターならびに米国政府指導者に社会主義社会の必然性と優位性を思いしらさせねばなりません。我国の独占資本、反動自民党政府に対してもしかりです。

私は独占資本主義の本源を知るとともに、社会主義社会の優位性とその必然を確信します。そして科学的社会主義の思想学習と実践を仲間、労働組合の中でより拡め、団結と拡大に参議院選挙を前に強めることこそ急務だと思えます。

“社会主義者は、労働者階級の直接当面する目的や利益を達成するためにたたかう、と同時に現在の運動のなかにあって、同時に運動の未来を代表する”(『共産党宣言』)意義ある、そして基本思想であり、常に活動家として心すべき言葉だと思えます。展望ある日々を送り得ることを大先輩に感謝します。生命ある限り私は社会主義者でありたい。

(鹿児島・K)

「八〇年代」への基本視点を示す！ 六月上旬発行  
 七〇年代労働運動の総括と八〇年代労働運動への提言

B6判・活版・価格未定

社会通信社は本年一〇月で四年目を迎えます。また九月一日には『旬刊社会通信』一〇〇号を迎えることとなります。読者の皆様の激励とご指導のたまものと深く感謝しております。

当社では一〇〇号を記念して、二つの企画を計画しております。

第一は、八〇年春闘、七〇年代労働運動を問い直し、階級的労働運動の再構築への論争の書『七〇年代労働運動の総括と八〇年代労働運動への提言』（岩井章・灰原茂雄編著）を六月初旬を目標に準備していることです。B6判、活版、二百四十頁くらいの予定です。内容は次のとおりです。

序 章

向坂逸郎

第一章 戦後労働運動の総括と八〇年代労働運動への提言

岩井 章

第二章 現代労働運動と労働組合の組織論

灰原茂雄

第三章 一九七〇年代後半の春闘とその教訓

第四章 日経連の労働運動対策

第五章 「政策」と階級闘争

第六章 「経営参加」論はなぜまちがいか

第七章 労働戦線統一への基本視点

第八章 日本共産党の労働運動論批判

第九章 社会主義政党と政策

補 論 エネルギ―問題への基本視点

※ できるだけお手軽な価格で発行します。

第二は、一〇〇号までの総目次の発行です。七〇年代後半の社会党、総評の動きを知るうえで簡単なものになるにちがいないと考えています。こちらの方も価格は未定ですが、原価でご希望の方にお届けします。お申し込み下さい。

（十頁からつづく）

民鉄協脱会）を、一人ひとりがかかりつかんでいると感じました。これが、本当の強さなのかなあと思いました」と感想文を書いています。また、七七年、七九年と、第一・二次の「京成闘争」をたたかいぬいてきた経験と自信が、資本を追いつめた結果「合理化提案を出させなかった」のだと思います。

資本主義社会が続く限り合理化は続きます。「窮乏化法則」も貫徹します。ともすれば、一部組合幹部はさびしい情勢のなかで、観念の世界で物事を考えたがります。「社公中軸路線」「右翼的労戦統一論」「経営参加論」等です。観念からの世界観は「常識論」に陥ります。まだまだ弱さの残る京成労組ですが、第一・三次の「京成闘争」を通じて感じることは、「大衆に依拠してたたかうこと」「実態からの運動が原点」「真正面からたたかったからこそ生活も職場も権利も守れた」ということです。

京成労組のたたかひの教訓が、資本主義の一般的危機の情勢の下で、強大な労働者階級の「反合理化統一闘争」として発展する条件が、八〇年代は必然的に深まるということです。

（京成・Y）